

『点石斎画報』と『飛影閣画報』から見た 呉友如の創作活動

——『申報』の記事を基本資料として——

鄧 怡 然

The study of Wu Youru's Pictorial Creation Activities
in the Dianshizhai Pictorial and Feiyongge

Pictorial: Take the notes of ShenBao as the main references

DENG Yiran

Wu Youru is one of the famous artist in late Qing Dynasty who made a great Contribution to the Dianshizhai Pictorial and also create another famous pictorial Feiyongge Pictorial. He combines the painting skills of traditional Chinese painting with the creative skills of Western painting. He was a representative of the painters of the News Illustrated in the late Qing Dynasty. He created a large number of works permeated with advanced western ideas and advanced science and technology, which opened a window for the people of the late Qing Dynasty to understand the world. Through the exploration of his behavior, we can feel how the western wind blew into the society in the late Qing Dynasty.

Key words: Wu Youru, Dianshizhai Pictorial, Feiyongge Pictorial, ShenPao

キーワード：呉友如、『点石斎画報』、『飛影閣画報』、『申報』

はじめに

写真などの近代的なメディアが未発達だった時代、異国を認識し、その情報を収集するためには、活字以外には、絵画という手段に頼ることしかできなかった。写實的、あるいは空想的に描かれた異国の様々な風景は、誤解や偏見を含んでいるものの、歴史における異文化交流の資料として重要な役割を果たしていたといえる。中国を例にとると、今から約百年前、上海で創刊された『点石斎画報』は、その嚆矢といえよう。この中には清末人たちの夢みたユートピア、西欧文化との接触によって引き起こされた驚愕、興奮、誤解が横溢していた。『点石斎画報』は、1884年5月（光緒10年4月）から1898年5月

(光緒24年7月)までの十五年間、上海の申報館から発行されていた旬刊絵入り新聞である。この絵入り新聞は、当時もっとも先進的であった石版印刷(リトグラフ)の技術を導入して印刷された。多種多様な主題の図像が制作され、多くの民衆に新聞記事や民間逸話、科学技術を伝えていた。

このような『点石齋画報』の成功に後押しされ、清末に画報の出版意欲が高まった。これらの動きは、清末民初の四十年に及ぶ石印画報の絶頂期の始まりである。これまでの先行研究をみると、1919年末までに、中国国内では118種類の画報が刊行され、その中の大多数は「絵の石印あるいは刻印版」である¹⁾。大部分の画報は『点石齋画報』の形式を踏襲しており、その影響の大きさがうかがえる。その中で最も大きな影響を受けたのは『点石齋画報』の主筆者である海派画家の呉友如が創設した『飛影閣画報』である。

1960年代以来、清末画報の研究は、特に『点石齋画報』の記事をめぐっては、すでに多くの紹介・研究がなされている。中国で最初に『点石齋画報』に注目した学者は戈公振である。「光緒十年，又附刊画報，每十日出一紙，一紙八图，所绘多时事，每纸取费八文，此为我国日报有增刊之始。」(中国报学史1982)その後、1980年代以降、『点石齋画報』についての研究がどんどん増え、美術史、科学史、宗教史、医学史、社会風俗史など、あらゆる角度から読み取ろうとする研究が出現した。例えば陳平原『点石齋画報選』(2000年)、陳平原・夏晓虹『図像晚清』(2001年)などがある。彼らは図像という特別な方法を通して、読者たちを歴史の境地に引き入れた。この他、日本語による抄訳としては、中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版——絵入新聞「点石齋画報」の世界』(1989年)がある。またドイツ語訳と英語訳もある。このような数多くの研究は、従来取り上げられなかった問題にも光を当てることになり、画報の意味や特定の現象そのものが、格段にきめ細かく明示的に分析・記述されるようになった。このように、清末画報研究の幅は大きく広がり、研究手法にも大きな進展・多様化が見られた。

こうした状況を受け、本稿は清末に創刊された『点石齋画報』を核に据えながらも、他の同時代の画報『飛影閣画報』との対話を図り、この二つの画報にとって架け橋のように重要な人物呉友如の生涯を深く掘り出し、彼の創作意識と当時の制作背景とを照らし合わせることで、受容層であった民衆が、これらの画報をどのように見ていたのかについても考察を行う。

多様化し深化してきた研究成果をできる限り広い範囲の研究者や未来の研究者との間で共有することによって、今後の清末画報研究を進展させるための一つの重要な情報源として、この論文を位置付けている。

一 『申報』の基本情報および主な研究資料として選ばれた理由

『申報』は、1872年にイギリス人アーネスト・メジャー(美查、Ernest Major)により上海で創刊された中国語の商業新聞である。現在、広く認められる説は、メジャーが、香港で茶の取引を行う商人であったということである。同時に漢文に精通した教養人でもあった彼は、茶の商売の失敗の後、当時の西洋で画報が盛んだったことを意識して、効率よく収益が得られる新聞刊行事業に投資することを

1) 彭永祥『辛亥革命时期期刊介绍』第四集、人民出版社、1986年。

選んだ。そして創刊されたのが、日刊新聞の『申報』である。

まず、なぜ『申報』を本稿の基本資料にしたのかという理由については、前述のように『申報』は1872年から創刊され、1910年2月に経営権がメジャーから上海の資産家・席裕福²⁾に移り、その後、1913年には史量才³⁾に売却された。史氏は改革を行い、『申報』の発展を促した。抗日戦争初期には上海で一時的に休刊するが、1938年1月15日から7月31日の期間には漢口版、1938年3月1日から1939年7月10日の期間には香港版がそれぞれ刊行されている。その間、『申報』は国家の政治、風俗の変遷、中外交渉の要務、商業貿易の利弊、科学的新知見の紹介および一切の驚愕すべきことや喜ぶべきことについて「その真実を探究し、読む者にわかりやすく伝える」⁴⁾とし、様々な面から中国清末時代の容貌を書き表すことを明らかにした。そのため、1949年の廃刊まで、『申報』は、中国で最も歴史が古く、かつ最も影響力の大きい中国語新聞となった。このような『申報』は清末から流行した画報の歴史を研究するのに最も適切な資料とも言えるだろう。また『申報』の生みの親であるメジャーは、『申報』の成功だけでは満足せず、続けて『申報』の出版元である「申報館」の傘下に「点石齋石印書局」を設立し、1884年『点石齋画報』を創刊した。従って、『点石齋画報』と『申報』は極めて密接な関係で繋がっていたと推測できる。『点石齋画報』の中の画報が、『申報』の記事を画家達の想像を加えて創作したものであることもよく研究者達に指摘されてきた。更に、この二つの画報及び呉友如に関する直接的資料の存在が極めて稀少であるものの、『申報』においては、関連する記事が多いということもあげられる。このように、『申報』を主な研究資料として、異なる角度からこの二つの画報を論じて、呉友如の創作活動を明らかにすることも重要な意義を持つことになる。

二 呉友如の生い立ちから見る『点石齋画報』と『飛影閣画報』への創作意識

『点石齋画報』と『飛影閣画報』の内容、創作背景及び影響などの考察を行っていくと、呉友如は決して無視できない存在であると考えられる。彼は『点石齋画報』の主筆であり、途中で『点石齋画報』の編集を抜け、『飛影閣画報』を創設した。呉友如はいったいどのような経緯で『点石齋画報』の編集を担ったのか。どのような努力をすることで、『点石齋画報』を清末中国画報の頂点にできたのか。そして何のため『点石齋画報』から抜け、自分の画報を作ったのか。また、二つの画報に対する、彼の創作意識がどんなふうにかわっていったのかについても一歩踏み込んでみたいと考える。ただ、これらを考察す

2) 席裕福、字は子佩、本籍は苏吳県洞庭東山である。その後は、朱家角鎮に引っ越した。清末の買弁で、彼の兄は席裕棋（字は子眉）、申報館で經理を務めていた。子眉は病気で亡くなり、その際には裕福が後任の經理を推薦した。メジャーは帰国した際（1909年宣統元年）に『申報』を席裕福に売却した。これについては、1947年9月20日発刊された『申報』は「…一九零九、美查公司董事擬出售申報，以擴充江蘇藥水廠，華經理席子佩君乃以七萬五千元的代價，把申報盤了下來。從此這最有歷史的言論機關，完全歸於國人了。這時距美查創辦包有三十七年，報館的洋商時代，至此才告一結束。」といった記述がある。

3) 史量才、(1880年1月2日-1934年11月13日)、名前は家修、字は量才である。本籍は南京市江宁区である。近代中国傑出した商人、新聞人、教育者であり、新聞業の巨匠、近代中国の優れた新聞経営者である。1912年から『申報』の経営者として勤めて始めた。

4) 『申報』1872年4月30日（清同治十一年三月二十三日）。

るためには、彼の流動的な人生の経歴について押さえておかねばならないであろう。しかし、呉友如のような民間の画師は、たとえ生時に著名であったとしても、その社会的身分が低かったために、正伝の記されることは稀であった。よって、呉友如の生涯に関しても、それを探るために必要な資料は、残念ながら充分には残されていない。本章で『申報』に見られる呉氏に関する記事を用いることで、その不足を補いたい。その作業を通して彼の創作意識などを分析し、清末上海の思想構造の一端を明らかにしたい。

1 年画師か新聞絵師か

先行研究によれば、呉の本名などは次のようである。

呉友如（1840年代-1894年、本名嘉猷、江蘇省元和県（蘇州）出身）は、新規のメディアである「画報」の制作にいち早く携わり、大きな影響力と名声とを獲得した画師である。彼は当時西洋からもたらされた文化であるジャーナリズムの普及のため、画報の経営を通じて深く関与し、その発展ために多大な貢献をした。

これまでの研究により呉友如は蘇州・桃花塢出身の年画師であることは明らかになっている。しかし、呉友如が年画の作成に参加したことについては、今に至るまで確実な文献や証拠がない。「法人求和」「劉軍門大敗法軍」などの桃花塢木刻現存版の呉友如年画の数枚が、実は石版原稿から翻刻されたものという疑いもある。

そこで、呉友如の生い立ちについては、1893年（光緒十九年）に出版された『飛影閣画報』に呉友如の自身が記した「小啓」が参考になる。彼は学芸の経緯と飛影閣を開設した理由を詳しく述べている。これは呉友如の生涯に新しい資料ともいえる。「小啓」中の関係部分は以下のものである。

……余幼承先人余荫，玩偈无成。弱冠后遭‘赭寇’之乱，避难来沪，始习丹青，每观名家真迹，辄为目热心存，至废寝食，探索久之，似有会悟，于是出而问世，藉以资生。……⁵⁾（私は小さい頃から先人の余慶を受け継いで、遊んでばかりいて何のろくなことも出来なかった。20歳の時、太平天国の乱を避けて上海に逃れ、そこで絵画を習い覚え始めた。名家の真跡を見るごとに、胸に刻んで、寝食を廃していた。長い時間を探索して悟りを得ることができ、才能をもって世に出たのである。）

これを見ると、彼は小さい頃から先人の余慶を受け継いで、遊んでばかりいて何も出来なかったと回顧している。20歳ごろ、太平天国の乱を避けて上海に逃れ、そこで絵画を習い覚え始めた。彼の年齢から推算してみると、彼が上海に着いたのは1861年頃（太平軍が蘇州を攻略したのは咸豊10年すなわち西暦1861年）であった。このとき彼はまだ20代前半である。『申報』の中で多くの記事が見られるが、彼は1894年（光緒20年）頃に他界した。つまり、彼は60才代で他界したことになる。彼の全体の芸術生活を概観すると、最初に絵に接触してから有名な民間画家になるまで例えば十数年かかると仮定すれば、有名な絵師になってから亡くなるまで二十数年に過ぎない。つまり、この20年以上の間、彼の主な仕事は

5) 呉友如「飛影閣画冊小啓」、『飛影閣画冊』第1号、1893年8月。

石版印刷の画報や雑誌のため絵を描くことであった。周知の通り、『点石齋画報』や『飛影閣画報』などは定期的な出版されていた刊行物であるため、絵師たちは限られた時間で一定数量の画報を提出しなければならない。呉も例外ではないが、彼の作品は緻密で、単に転用するのではなく典範となる作品とは異なる内容を描いたり、図様に改変を加えたりするなどの工夫を加えている。そのような状況の中で数多くの作品を創作した。これにより、彼の当時の仕事の緊迫した忙しさが想像できるだろう。従って、蘇州桃花塢年画に従事する余力があるかどうか、大いに疑問に思われる。郷土観念によって、たまに一つ二つをつくることは、可能かもしれないが、確実な材料はないのである。

では、今呉友如の印が落ちている蘇州桃花塢年画をどう説明したらいいのかについては、筆者は以下のように考えている。清末に石印画が流行して以来、蘇州桃花塢はかつて木版画で復刻されたことがある。石印出版物を敵に回すことはできないが、桃花塢の伝統的な色彩に加え、独特の販路もある。こんな復刻年画は今までも多く保存されている。呉氏は当時有名な絵師であるため、彼の作品は言うまでもなく復刻の対象であった。だからこそ、呉友如もとは蘇州虎丘画舗中の絵師の説がすべて空になっていた。彼を主な桃花塢の年画作家にしたのは事実ではない。結局、呉氏は古今東西の雑多な文化が交差され、錯綜する喧騒の都市上海で育てられた民間絵師と言えるのではないだろうか。

2 呉友如と『点石齋画報』

呉氏と『点石齋画報』が関係し始めたのは、1884年5月（光緒十年四月十四日）で『申報』を経営していたイギリス人メジャーが、『点石齋画報』を創刊したことがきっかけである。メジャーは呉友如に向かって、『点石齋画報』の新聞画師に就任するように要請した。メジャーが呉友如を絵画主幹などという大役に抜擢したのかについては、当時の資料を見てみるとその理由がわかる。まず、『点石齋画報』を創刊される前に呉友如はすでに有名な絵師になっていた。それについては、『申報』の中で次のような記事が見られる。

新印對聯冊頁横幅屏條出售點石齋主人啓

茲本齋有新印彭詠莪相國篆書七言禮帖鄧頑伯先生隸書冊頁條並有著色上海靜安寺圖此圖係請名手吳友如先生結撰極爲精緻現已石印工竣即日出售該價 聯白紙未裱者每副洋兩角色兩角五 裱成者每副加兩角冊頁未裱者洋兩角已裱者四角屏條未裱者三角五分綾邊裱成者八角靜安寺圖未裱者每張洋一元三角已裱者一元七角售處仍照曩例諸君幸即賜顧爲盼⁶⁾（本館は彭詠莪相國の七字篆書の手本と鄧頑伯先生の隸書作品を印刷した。ほかには名手吳友如先生によって描かれた上海靜安寺図も印刷されている。非常に精緻なものである。今印刷作業も終わり、間もなく販売となる。白紙で表装してないのは洋兩角で、着色したものは洋兩角五である。表装したものは二角を加える。精緻な表装したものは八角である。靜安寺図は表装してないものが洋一元三角で、表装したものは一元七角である。販売する場所はかわっていない。多くのおいでをお待ちする。）

6) 『申報』1883年11月17日（光緒九年十月十八日）

この記事では呉氏は「名手吳友如」と書かれている。1883年（光緒九年）『点石齋画報』がまだ創刊される前、呉氏は人気の絵師であったことも明らかである。もうひとつは呉友如によって描れた上海静安寺図の値段が、一元三角から設定されたことが明記されている。当時の民衆にとっては、とても高価であった。『点石齋画報』の値段は5分であった⁷⁾。『飛影閣画報』も同じ値段を設置されていた⁸⁾。しかも、「相國」彭詠莪と清朝書道の大家鄧頑伯の印刷された作品の値段に対しても、値段は大きく上回っている。これをみると、呉友如によって描れた上海静安寺図は、とても高い価値を持っていたことがわかる。当時呉氏の地位や名声があったことの証拠ではないかと考えられる。

呉氏が『点石齋画報』を創刊する前に、すでにそれなりの名声を博していたことは、『点石齋画報』を創刊した時に『申報』に掲載された最初の広告からも見える。

本館新創畫報特請善畫名手選擇新聞中可驚可喜之事繪製成圖附事路由點石齋刪印每月定數次每次八圖由送報者隨報出售每本收回工料洋五分其摹繪之精 筆法之細補之工諒購閱諸君自能有目共賞無俟…⁹⁾（本館は新しい画報を出版して絵画報の有名人に依頼し、新奇で喜ばしいことを選んで、そっくり模して描いている。これは點石齋で編集して毎月定期的に、毎回八図にする予定である。『申報』に附加して皆さんに配布する。1冊は洋5分で売出す。その精妙な筆法などを購入する諸君は鑑賞することができる。）

上記の二つの『申報』記事から呉氏は間違いなく「精妙な筆法」を持っており、当時の上海の有名な絵師であるだけでなく、彼の作品も非常に人気があったことがわかる。したがって、著名な画師を招けば画報の格が上がり、また、名人の絵を一目拝みたいとの動機で読者も増える。このようなメリットを考えたのであろう。

二つめは、呉氏が石版印刷に対する理解も備えた人物でありながら、技術面では西洋画の技法を受容しうる高い技能が、また、思想面では、西洋的写実の価値観を十分に理解しうる柔軟性が、メジャーの求めた特殊な条件を満たせる人材となったからである¹⁰⁾。前の資料で示したように、『点石齋画報』を創刊する前から呉氏は石版印刷と接触していた。画家は読者たちに石版印刷技術で印刷された画の完璧な芸術効果を表現しようとする場合、石版印刷に対する深い理解が必要である。ゆえに彼が他の画師に比べて、石版印刷画報という物を制作するうえで必要とされる諸知識を、より実感的に把握しやすい立

7) 『申報』1884年5月8日（光緒十年四月十四日）

畫報出售申報館主人啓

本館新創畫報特請善畫名手選擇新聞中可驚可喜之事繪製成圖並附事路由點石齋刪印每月定數次每次八圖由送報者隨報出售每本收回工料洋五分其摹繪之精筆法之細補…

8) 『申報』1890年10月14日（光緒十六年九月初一日）

新出飛影閣畫報飛影閣主謹白

…余敢不盡技以獻耶計每冊價洋五分託申報館及各埠售報處代售賜顧者請就近購閱爲盼此佈

9) 『申報』1884年5月8日（光緒十年四月十四日）

10) 若杉邦子『『華洋雜居』の作品世界 一吳友如の創作意識について一』、『中国言語文化研究』第8号

場に居たといえる。

さらに、呉氏が上海に来てから絵画を勉強しようとした時に、上海の画業に就いていたものたちの価値観や知識、技術の上でも彼らの西洋絵画に深い影響を及ぼしたことも当然のなりゆきであった。例を挙げると、1879年の『申報』に次のような広告がある。

洋畫出售

本館從英國購得極精極細之洋畫凡數百種早經出售賜顧奢威贊不絕口今尚存有多幅價錢格外便宜望諸君早日來本館帳房購取盼甚¹¹⁾（本館は英国から数百種類の精妙な西洋画を輸入し大好評を受けた。今いくらかの画が残されているので、それを安く売り出す。どうか皆さんが早めに買いに来ることをお待ちしております。）

以上のことから見ると、当時西洋画も流行していたことがわかる。1861年から上海に来ていた呉友如は、洋画を見る機会あるいは模写する機会を有していたことは間違いない。このような東洋の伝統と西洋意識の交わる雰囲気の中で育てられた彼は、西洋画法及び西洋の先進な思想に対して、どんな態度を持っていたかについては以下のようなようである。

绘画当跟时代而变迁，时代有这东西，尽可取为画材。我们瞧了宋元人的画，没有不以为古雅绝俗，岂知宋元人当时作画，也不过画些眼前景物罢了。那么现在既有新事物和我们接触，我们为什么要拒绝它呢。¹²⁾（絵画は時代とともにうつりかわっていくはず、それぞれの時代に存在するものを、できるだけ画題として取り上げていくべきである。我々は宋元時代の人の絵画を見ると、とても古雅超俗であると思うが、宋元の人々はただその時々における画作もまた、眼前の景物を描いたものにすぎなかったということである。それならば、今新しい事物とわれわれが接しているからには、どうしてそれらを拒まねばならないだろう。）

また、ほかの資料を探せば、1884年彼は「春江胜景图卷」を作った時に、以下の文が付け加えられていた。「文人但知古，通人也知今。一事不知儒者耻，会须一一罗胸襟。心胸上下五千年，笔墨纵横九万里，见闻历历备于此，读之可惊可喜。费去十文买一纸，博古通今从此始。」¹³⁾ 彼は文人が古今のことに通曉すべきであり、心の中の見聞を豊かにしなければならぬと主張した。まだ封建社会からぬけ出していない時代であって彼の思想の先進性が垣間見ることができるのである。そのような文化に触れながら育った呉氏は、洋風画表現を用いるとともに、従来の型に囚われない絵を制作することにも注力した。彼は従来の西洋画法に見られた「写実」を意識することに加えて、移り変わり当時の流行をいかに新しい表現を用いて描き出すのか、という試みが意識されていると考えられる。

11) 『申報』1879年1月13日（光緒四年十二月二十一日）

12) 鄭逸梅「点石齋石印書局和呉友如其人」（『鄭逸梅選集』第一卷、黒竜江人民出版社、1991年、822頁）

13) 呉友如「春江胜景图」，卷下。張静庐『中国近代出版史料二編』（群聯出版社、1954年、第1頁）から引用。

それはまさにメジャーにとって、まさに焦がれた末の待ち人だったのではなからうか。それに対して、メジャーが著した『点石齋画報』の序文「点石齋画報縁啓」（光緒十年（1884）年暮春）から、文章の一部を引用してみたい。

画報盛行泰西，…中国画家拘于成法，有一定之格局，先事布置，然后穿插以取势，而结构之疏密，气韵之厚薄，则视其人力之高下，与胸次之宽狭，以判等差。要之，西画以能肖为上，中国画以能工为贵，肖者真，工者不必真也，既不皆真，则记其事又胡取其有形乎哉¹⁴⁾（画報は西洋で盛んに流行している。…中国の画家は伝統的な画法に縛られていて、きまったやりかたにこだわり、一定の型を持っている。中身より先に構図を決めて、それから情勢を描きこむ。画の構造の疎密さ、気韻の厚さは、その人の学力と度量を通じて彼の画法の優良を判断する。要するに、西洋画はそっくりに似せうることを上位に置き、中国画はたくみに描けることが貴重とみなすのだ。似ているものは真であるが、たくみなものは必ずしも真とはいえない。全てが真というわけではない以上、事を記してもあいまいで、形になるだろうか。）

これは、メジャーによる「写実論」であるが、彼はこのように、それまでの中国絵画とは完全に異質な、リアリズムに徹した画作をこそ求めたのであった。『点石齋画報』における「徹底的な写実」という基本方針は、経営者のメジャーによってあらかじめ敷かれた路線であった。そして彼は斬新な発想に富み、しかもリアルな表現にこだわっていたのである。そこで彼は彼の要求に合致する、有能な中国人画師呉友如を発見し、『点石齋画報』の主筆絵師を要請した。

三つめの要因を考えてみると、呉氏が上海に来てから徐々に自分の画師チームを形成していった。『点石齋画報』は1884年5月8日に創刊されてから1898年8月に終刊されるまでの、15年間に総計528号が発行され、4666枚の文字が添えられた手絵石印画が刊行された。身元が判明している23人の絵師のうち、呉友如の絵は443コマ、金桂の絵は1126コマ、張志瀛の絵は501コマ、田英の絵は210コマ、周慕橋の絵は135コマ、何元俊の絵は810コマ、符節の絵は1169コマである。この7人によって描かれた画報は『点石齋画報』全体の約94%を占めていた。残りの一部分は民間絵師達から募集されたようである。これについて、『申報』の中には次のような記事がある。

請各處名手專畫新聞啓點石齋主人啓

本齋印售畫報月凡數次業已盛行惟惟各外埠所有奇奇怪怪之事除已登申報外能繪入畫圖者尚復指不勝屈故本齋特請海內大畫家如遇本處有可驚可喜之事以潔白紙新鮮濃墨繪成畫幅另紙署明事之原委函寄本齋如果惟妙惟肖足以列入畫報者每幅酬筆資洋兩元…¹⁵⁾（全国の画家先生にお願いする。本館は、画報を出版して何か月を経ているが、新奇で喜ばしいことを『申報』に載せた他画報に入れたものも数え切れない。今、海内の大家から画を募集している。もし驚くべき事件、面白い事件などがあ

14) 『点石齋画報』 広東省人民出版社，1983年6月。

15) 『申報』 1884年6月4日（光緒十年五月十五日）

れば、真っ白い紙にきれいな墨をもって絵に仕上げ、また別の紙に事件の次第をはっきりと記入し、本齋まで送ってほしい。優れた作品は画報に使用して、洋兩元の報酬を支払いさせていただく。）

この記述から、『点石齋画報』は自分の絵師達が制作した画報を出版した以外に、民間の絵師の作品も高値で募集していたようである。では、なぜ『点石齋画報』は民間絵師の作品を募集していたのか。これについては、例えば、以下のような記述がある。鄭逸梅の『美文類編：前尘旧梦——名家年画数从頭』中で「周慕橋“从吳友如游”」（周と呉の刎第の關係を表した。）¹⁶⁾という言葉が出た。また他の絵師の資料を見ると、例えば、田子琳曾は『申報』の中で「前聞吳門謝君綏之因中州全省各處時災，飢民苦不可言，……因與同郡田君子琳揣度荒象，曲意描摹，繪成十有二圖，名曰「河南奇荒鉄泪図」と述べている¹⁷⁾。以上から、『点石齋画報』絵師チームの主なメンバーは蘇州出身者が多く、師匠と弟子のような密接な關係があったようである。

このように、メジャーにとっては、呉氏を中心とした優れた絵師チームを持っていたことによって、安定的な数の画報を出版すること、及び画報の風格を一致させることができるようになったのである。かつ絵師達の間にも密接な繋がりがあるため、人材の流出も防がれ、『点石齋画報』の成功の土台を作ったと思われる。

以上の三つの理由によって、メジャーが呉友如を選択したことは偶然ではないことがわかる。

さて、呉友如は点石齋に入ってから、彼の創作活動はどんなふう展開していったのか、また彼の創作意欲はどんな方向に進んでいるのかを次に見ていきたい。

3 呉友如と『飛影閣画報』

呉友如は1890年に『点石齋画報』から離れた。同年に自身で『飛影閣画報』を創刊し、こちらもよい評判を受けた。つまり画報の道で大成功を収めたと言えるのである。

『飛影閣画報』は『点石齋画報』の風格を受け継ぎ、新聞画と記事の内容から主として革新性や実験性、話題・画題の卑俗性等々の要素に溢れていた。それ以外に、当時の上海の女子の日常生活についても毎期の『飛影閣画報』の第一ページに掲載された。(図1、2)¹⁸⁾

さて、呉友如は何故『点石齋画報』が大いに発展している時に立ち去ったのか。しかも、この後、『点石齋画報』の風格と非常に似ている新しい画報を作ったのか。今まで、多くの学者たちがこれについての原因を指摘してきたが、筆者は『申報』の記事を中心として、もう一度まとめて整理し、これまで指摘されていない原因を探してみたい。

まず、『点石齋画報』と『飛影閣画報』を創刊した動機を比較してみると、呉友如が『点石齋画報』をやめた主な原因が明らかになる。ヨーロッパでは画報が大いに流行していたので、中国にもいよいよ画報を創刊すべき時が到来したのだと信じていたメジャーが画報を発刊した目的としては、いくつかを挙げることができる。その中で、商人出身のメジャーが一番重視した目的は、経済利益を求めること

16) 鄭逸梅『美文類編：前尘旧梦——名家年画数从頭』、北方文芸出版社、2009年1月。

17) 『申報』1878年3月16日（光緒四年三月二十三日）

18) 図1 呉友如『飛影閣画報』第三十七号。図2 周慕橋『飛影閣画報』第九十四号。



図1 「金井秋蘭」



図2 「教之乘车」

であったことは否定できない。『申報』事業を展開した際に、次のように述べている。

「夫新報之开馆卖报也，大抵以行业营生为计。」¹⁹⁾ 同時に、彼は中国人が重義軽利の伝統観念を持っていたことにも気配りした。「亦愿自伸不全忘义之怀也。」（義理も忘れないよう）

また、メジャーが著した『点石齋画報』の序文「点石齋画報縁啓」（光緒十年（1884）年暮春）には次のようにある。

「画报盛行于泰西，盖取各馆新闻事迹之颖异者，或新出一器，乍见一物，皆为绘图缀说，已征阅者之信。…爰倩精于绘事者，择新奇可喜之事，摹而为图，月出三次，次凡八幅，俾乐观新闻者有以考证其事。而茗余酒后，展卷玩赏，亦足以增色舞眉飞之乐。倘为本馆利市计，必谓斯图一出，定将不翼而飞，不胫而走，则余岂敢」²⁰⁾（ヨーロッパでは画報が大いに流行して、面白い事件があったり、珍しい物事が出たら、絵師たちは必ず絵に仕立て、文字にする。読者たちの信頼も得ている。…絵事に精通している者は、新奇で喜ばしいことを選び、模写して、月に三回、毎回八幅の図、ニュース報道に興味を抱く人の考証の助けとする。お茶や酒の後、巻を広げて観賞することも、目を楽しませ、眉を上げるような楽しみを増すことができる。）

これらのことから『点石齋画報』によって制作された画報は他のメディアを凌駕するほどの部数を発行した。これによって多くの民衆に西洋知識などを伝えたが、利益を得るために民衆の興味を引くような話題を含むものばかりが優先され、質の低いものが数多く出回るようになっていたのである。

だからこそ、中国の伝統的な文人の節操を持っていた呉友如にとっては、許しがたいものであったのだろう。彼は自分をもっと優秀な作品を作って、さらに、その作品がもっと多くの人に認められることを望んでいた。しかし、『点石齋画報』は創作モデルを持って、画報の内容もほぼ決められた。これでは

19) 『申報』「论本馆作报本意」1875年10月11日（光緒一年九月初五日）

20) 尊聞閣主人「点石齋画報縁啓」『点石齋画報』第一号（甲一册），1884年5月8日（光緒十年四月十四日）

彼は自分の理想を実現することができなかった。これについて、呉氏は1890年に『飛影閣画報』を創刊した経緯を『申報』に発表した。

出飛影閣畫報飛影閣主謹白

畫報昉自泰西領異標新足以廣見聞資懲勸余見而善之每擬仿印行世志焉未逮適點石齋首先創印倩余圖繪賞鑒家僉以余所繪諸圖爲不謬而又惜夫余所繪者每冊中不過什之二三也旋應曾宮太保之召繪平定粵匪功臣戰蹟等圖圖成進呈御覽倖邀稱賞回寓滬海內諸君子爭以縑素相屬幾于日不暇給爰擬另創飛影閣畫報以酬知己事實爰采乎新圖說必求其當每月逢三出報每冊十頁仿摺疊式裝成准于九月初初三日爲第一期屆期即將天錫純嘏等數圖謹列報中並附冊頁三種曰百獸圖說閨艷彙編滬妝士女他日或更換人物山水翎毛等冊必使成帙斷無中止至於工料精良更不待言夫以一人之筆墨而欲壓通都大邑海濱山陬之人之心此亦至不及之勢是冊一出吾知向之爭先恐後以索得余畫本爲幸者當無不怡然渙然矣然則是冊也余敢不盡技以獻耶計每冊價洋五分託申報館及各埠售報處代售賜顧者請就近購閱爲盼此佈²¹⁾

以上の記述の中で、特に「海内諸君子爭以縑素相屬幾于日不暇給爰擬另創飛影閣畫報以酬知己」（私の画を求める方が非常に多いので、そんなに多くの画を描く時間が足りないのだ。だから、飛影閣畫報を創設して、皆さんの好意に答えたい。）というのは呉氏の動機をまさに明確に示している。

画報の内容から「並附冊頁三種曰百獸圖說閨艷彙編滬妝士女他日或更換人物山水翎毛等」（百獸圖說、閨艷彙編と滬妝士女の三種類の内容あるいは人物山水の画を附加した。）見ると、この新しく増設された三種類の内容はすべて呉氏の得意分野であった。彼はようやく好きな風格の画を描き出すことができるようになったのである。

また、『点石齋画報』の中で封建政権を支持するという政治傾向が溢れていることがいろんな内容から見られる。例を挙げると、1884年7月（光緒十年六月）に『申報』に次のような広告を載せている。

第九號畫報出售 點石齋主啓

本館凡得本朝名臣圖像立倩畫手謹敬鈎摹演說近時事蹟列入畫報以饜四海欽仰之誠故前次三號畫報中繪有李傅相曾襲侯像而此次九號又有親王大臣與左侯相玉照想傾心賢哲者自必先觀爲快也…之此布²²⁾
（本館は自国の有名な大臣の図像を入手すれば、絵師達に彼らの政治演説や時事新聞を絵に描いて画報に入れさせて、四海にいる皆さんの尊敬の念や敬慕の気持ちに応える。この前出版された第三号画報の中で李宰相の図像を描いた。また今回の第九号画報の中では大臣與左侯の図像があった。賢者に敬慕する人はぜひご覧きたい。以上、広告する。）

21) 『申報』1890年10月14日（光緒十六年九月初一日）

22) 『申報』1884年7月26日（光緒十年六月初五）

『点石齋画報』を創刊して間もない頃に、清朝政府に対して積極的な態度を示していたことがわかる。『点石齋画報』の絵師として、清朝大臣の図像をはじめ、政治に関わる大量の画報を描かなければならなかったのだが、(図3と図4は上記の内容の中に言及された図である²³⁾。)それは、呉氏が独自の画法表現を世の中に発信したいという考えと矛盾していたのではなかったと思われる。

以上二つの方面から呉友如が何故『点石齋画報』を離れた理由について述べた。清末は中国人々が西洋世界への憧れが高まっている時期である。こうした状況の中で、呉友如をはじめの民間絵師たちの絵の創出という大きな転換期を迎えた『点石齋画報』や『飛影閣画報』が、とても重大な意義を持っている。

『点石齋画報』から『飛影閣画報』までの創作過程の中で、呉氏の絵が単なる模写だけではなく、卓越した芸術感覚や画面の構成力、人物の小さな所作や微小な表情に感情を宿す表現力など補って余りある画才を持っていたのであろう。また、彼は当時の西洋画法と中国伝統的な技法を融合する発展方向をしっかりと把握していた上で、最後まで自らが得意とする抒情的な美人画や山水風景画を描き続けた。このように、呉氏は自己の確固たる審美眼を持ち、またそれに基づいて当時の奇聞逸話を選択して制作を行ったのである。



図3 勲舊殊榮



図4 致李中堂書

23) 図3『点石齋画報』甲集、第三号。図4『点石齋画報』甲集、第九号。

4 呉友如の逝去について

呉氏の逝去について、『申報』には次のような記事が見られる。

『飛影閣画冊』告白申报館代啓

第十册画冊本应十五日出售，不料吴君友如癯疾，于十一日逝世，所绘画冊尚未装订齐全，故十五一期作为罢论，准二十日预出。…嗟乎，斯人既归天上，妙绩永绝人间，想海内赏鉴者当亦同声悼惜也。²⁴⁾（『飛影閣画冊』は十五日から販売する予定であるが、残念ながら、呉君は十一日に病気で逝去したので、いろいろな準備がまだ終わっていない。そのため、二十日に延長させていただく…。呉君は天国に行った。四海の同好者が嘆き悲しんだ。）

この記事によって、呉氏が光緒十九年十二月十一日で亡くなったことがわかる。西暦1894年1月17日である。

光緒二十年正月初四日（1894年2月9日）に、『申報』は『飛影閣画冊』について次のように述べている。

『飛影閣画冊』第十次画冊已于腊月二十日预登《申报》，册内所绘系十八学士登瀛洲图，并附送着色平地春雷立轴一张，每册价洋五分，仍由本馆及各埠申昌寄售，赐顾者请就近购阅为禱。再查吴友如先生身后所遗画稿甚多，拟选其佳者仍付石印，装订成册，以共同好。一俟出书，再行登报布闻。²⁵⁾

上記の内容では、『飛影閣画集』の10冊目が出版されたこと以外にも、特に呉氏の遺した原稿が多いと言われ、この中の優良なものを選択し、印刷して画集を刊行した。この記事で書いたように「以共同好」（同じ趣味を持っている人々のため）を強調しことは呉氏が伝統的な文人の共同な理想を持っていたことの重要な証拠ではないだろうか。呉氏が亡くなった数ヶ月後、『申報』は以下の記事を掲載した。

飞影阁新出中日战图飞影阁后前吴友如先生所创石印画图，其用笔惨淡经营，布置缜密，洵称独步一时，故能风行中外。自吴谢世，继起为难，惟周君慕桥天姿秀拔，笔意清超，所绩中日水陆交战图二幅，别出心裁，尽脱窠臼，可与吴君后先媲美。今已告成，别外加封套，计实洋五分，由本阁及申昌并卖报人处，苏州抚松馆、蕴辉室均有发售，谅为识者所共赏也。²⁶⁾（飛影閣は新しい日中戦争図を販売した。呉友如先生は石版印刷画報を作ったが、技法や構図が上手なので、一世を風靡した。呉君が逝去した後、彼の才能を継承される後輩は少ないが、この中で、周君だけが抜群な資性を持っている。彼は日中戦争図を描いた。この画で新しい工夫を凝らし、古い格式から抜け出したことは呉氏と肩を並べたと言える。今、この作品を表紙を付けて洋五分の値段で本館や苏州抚松馆、蕴辉室

24) 『申報』1894年1月21日（光緒十九年十二月十五日）

25) 『申報』1894年2月9日（光緒二十年正月初四日）

26) 『申報』1894年8月30日（光緒二十年七月二十三日）

などのところで購入することができる。識者と共に鑑賞いただくことを望む。)

この記事は、呉友如が逝去した後、飛影閣が周慕橋に引き継がれ、同時に飛影閣が経営のために周慕橋の宣伝を始めたことなどを示している。

呉氏が世を去ったことは彼の創作活動の終止符であった。しかし、彼の創作意識及び芸術に対する追求と理想は、一定程度、周慕橋に受け継がれた。『点石斎画報』と『飛影閣画報』は清末中国の画報創作の新しい境地を開拓した。『点石斎画報』を皮切りに外国の先進科学技術や政治体制、地理、珍事件などの中国人にとっての「外の世界」と、国内のさまざまな出来事や伝統的・教訓的な怪談話などの中国人の「経験のなかの世界」という2つの異なる世界を、現代の目からみれば奇妙で、矛盾していると思えないようなイデオロギーにより統合したかたちで報道した新聞画報が誕生した。その一方で、呉氏は自分の「以酬知己」という夢をあきらめず、『点石斎画報』の成功経験を吸収した上で『飛影閣画報』を創設したことで、清末中国画報の発展に大きく貢献したのであった。この二つの画報は莫大な発行数量があることから、清末中国の近代化に深く影響を与えたと言えるだろう。

三 『点石斎画報』と『飛影閣画報』の受容と影響

『点石斎画報』の発行に先立つこと七年前の1877年、メジャーの申報社から中国最初の画報とされる『瀛寰画報 (Wide World Illustrated News)』が出版された²⁷⁾。また、これと同時期に出版された『格致彙編』(科学雑誌、1876-1892)にも図画が豊富に収録されており²⁸⁾、その後、1880年には『画図新報』という画報が創刊された²⁹⁾。このような多くの画報の中で、今まで最も大きな影響がある画報は『点石斎画報』であると言えるだろう。『点石斎画報』の莫大な発行数量がそのことを如実に示している。

『点石斎画報』を発行した直後「购者纷纷,后卷嗣出,前卷已空。」³⁰⁾(購買者が多すぎて、次号が出ないうちに前号がもう完売した。)という状況が出ていた。そこで読者の期待に応えるべく(「以备诸君补购」³¹⁾)、点石斎石版書局は絶え間なく『点石斎画報』を重版した。しかし、それでも「司石司墨者日辄数易手犹不暇给」³²⁾(印刷する人が毎日大量の画報を印刷したが、皆様の需要を満たせない。)といった状況であった。

『点石斎画報』は独特な魅力を持っているため、それからずっと驚異的な部数を発行していた。第三

27) 阿英「中国画報発展之経過一一為『良友』一百五十期紀念号作」(『阿英美術論文集』人民美術出版社1982年8月、75頁)

28) 『格致彙編』南京図書館蔵(南京古旧書店、1992年6月)

29) 1880年5月(清光緒六年四月)、宣教師范约翰(John Marshall Willoughby Farnham)は上海で『画図新報』を創刊した。

30) 『申報』「見所見齋甫稿, 阅画报书后」1884年6月19日(光緒十年五月二十六日)

31) 『申報』「申报馆主后, 第二号画报出售」1884年5月17日(光緒十年四月二十三日)

32) 同32

百号の時、点石齋石版書局は「賞鑑家虽重价搜求亦有未能重窺全豹之憾」³³⁾（鑑賞家は大金で画報を買収するが、なかなか全部の画報を手に入れることが難しい）のため、「不惜工本，特將缺号逐一补印齐全」（手前を惜しかず、缺号を増補を施した）が行われた。以上のことによって、『点石齋画報』が発行された期間中に民衆に大いに受け入れられていたことがわかる。それだけではなく、『点石齋画報』がすでに終刊した後に、依然として大人気であったことも、『申報』の中で掲載された記事から読み取れる。

華報館經理點石齋画報

石印之法本齋獨創故所印畫報風行海内十三年久已膾炙人口茲由華報館經售以來大加整頓添傳名手寫作俱佳繪影繪聲惟妙惟肖固已有目共賞前因恐不敷售增增印五百本而賜顧者仍紛至沓來數日售罄閱者憾焉茲再增印一千本以副諸君先觀爲快之意本期業經印就圖既精良事尤新異速向華報館帳房及各外埠代售華報人零躉批發再本齋石印書籍甚多各外埠亦可函致華報館及本局局批發價均克已藉廣招徠恐未週知特此聲明 點石齋謹啓

これは1897年（光緒二十三年）に『申報』に載せられた記述であるがこれによって、『点石齋画報』がすでに終刊した2年後で、華報館は五百本画報を印刷して、数日で全部完売した。そして、あらためて1000本を再印刷したことがわかる。また、1910年と1911年に『点石齋画報全集』を販売する広告もある。

點石齋畫報大全出售預約廣告

我國西法石印創始於點石齋點石齋畫報又爲後來畫報之鼻祖凡名山勝蹟歐美奇聞風流韻事無不繪影繪聲惟妙惟肖且題眉屬稿均係一時名手如大畫家吳友如先生尤爲精神所注惟相隔數十年當時購閱者至今已散失無存即有一二儲藏亦奉若 璧不輕傳示藝術家每以莫窺全豹爲憾今本公司爲餉遺後學起見集原稿選用中國潔白連史紙上等洋墨重印行世名曰點石齋畫報大全其工細處與原册絲毫不爽而裝潢華美大可爲文房增色展卷一過儼若置身過去世界形形色色奇奇怪怪目不暇給既可當畫譜撫摹又可作說部觀覽誠大觀也現已開印定期出版約有五千頁之譜計裝訂八十八册每部原定價洋四十四元因欲欲公諸同好特售預約券一百份照收紙墨費半價廿二元購券者先交洋十元掣取預約券紙樣本一大册至八月底再交洋十二元隨取全書並附送畫册二本共九十册海內外藝術家尚祈注意速購爲幸外埠郵費輪車已通之處洋一元五角陝甘雲貴川五省加倍售券處申報館上海棋盤街集成圖書公司總發行所啓³⁴⁾

點石齋畫報大全第二次重印出售預約券廣告

點石齋畫報係大畫家吳友如先生主稿布景立局卓然名家至今海内流傳無不奉爲秘寶去年本公司預約重印以只限百部一售即罄如東瀛美術館訂購十部及京師諸名公之函購在後者均無以應架深歉然茲因徇東友之請續印百部仍售預約券以免向隅而廣傳布計全書五千餘頁裝訂八十八册自第一號至末號原原本本故曰大全紙墨煇奶裝潢華美購置案頭既可當畫譜摹臨又可作說部披覽丹青家藝術家諒有同好尚祈注意

33) 『申報』「点石齋后一号至三百号全部画报发兑」1892年6月1日（光緒十八年五月二十日）

34) 『申報』1910年7月15日（宣統二年六月初九日）

速購預約簡章（一）全書八十八冊附贈名畫二冊共九十冊照原價四十四元減收半價二十二元以一百份爲限（二）購券者先付洋十元掣取預約券一紙樣本一冊至六月底再付十二元取書全部券即繳銷³⁵⁾

この二つの広告によって、『点石齋画報』が終刊した十年後、『点石齋画報全集』はさらに二度販売されたことが明らかである。その人気ぶりは変わらず、広告の中には呉氏に対する称賛が溢れていた。

さて、呉友如は『点石齋画報』の大成功のおかげで、一層の大きな名声を得たとともに、彼がこの後創刊した『飛影閣画報』も当時の人々に注目され、歓迎された。次は『飛影閣画報』第一号を出版した後の『申報』の記事である。

飛影閣第一期画報出，荷蒙遐迩諸君子爭先快睹，几于应接不暇。其章法之老到，采擇之新奇，布置之安詳，点缀之精密，早入大雅洞鑒之中，无煩贅及矣…³⁶⁾（皆様のお世話になる、『飛影閣画報』第一号は世に出るとすぐに売り切れた。先行者の経験を大いに参考し、新奇なことを選んで、精緻で硬質な筆線で描かれており、さすが高雅な作品であることは重ねて言うまでもない…）

上記の記事が発表された次の月に、飛影閣についてのほかの記事も『申報』に掲載された。

新出飛影閣畫報告白申報館帳房代啓

同一畫也不特繪形繪色而并能繪影繪聲所謂化工之筆也昔人有畫看花歸去馬蹄香之句者或作落英滿地或作散花沾衣內一畫師 畫一人一騎騎後有兩三峽蝶欸欸隨之便將香字之神於阿堵中傳出飛影閣主深得此中三昧故其所繪諸圖迥然各別惟妙惟肖茲復採取新開七則後仍附百獸等三圖准於廿三日出報其第一第二兩期之報業已添印數千本 副博雅諸君之雅意馬欲購者請至本帳房可也外埠各申昌及賣報人亦有代售此佈³⁷⁾

以上の二件の記事により、「其第一第二兩期之報業已添印數千本」（『飛影閣画報』の第一号と二号も何千本の数を印刷した。）ということで『飛影閣画報』の盛況ぶりがうかがえる。かつ、当時の人々が「新奇なこと」に非常に興味深いことも見て取れる。

おわりに

本稿は「中国」と「西洋」が交錯する清末の上海における呉友如の生い立ちから、彼の創作活動及び彼の作品の受容と影響などの分析を通じて、呉氏の作品が中国文化という強固な基盤の表層部分に、自らの解釈のもと熱心に西洋風の文化という新奇な装飾を施したかのごとき、摩訶不思議な様相を呈して

35) 1911年3月18日（宣統三年二月十八日）

36) 『申報』1890年10月26日（光緒十六年九月十三日）

37) 『申報』1890年11月4日（光緒十六年九月二十日日）

いたことを明らかにした。同時に、彼は洋画技法の吸収に取り組んだ人物であったが、中国伝統文化人としての初心を忘れず、人生の最後の時期で自らの理想をかなえることと芸術創造の知己を得るために、自分自身の画報を作った。『点石齋画報』と『飛影閣画報』は、どちらも、彼の非凡な芸術的才能が凝縮されている宝物である。

『点石齋画報』と『飛影閣画報』にある報道は、外国の先進科学技術や政治体制、地理、珍事件などの中国人にとっての「外の世界」と、国内のさまざまな出来事や伝統的・教訓的な怪談話などの、中国人の「経験のなかの世界」という2つの異なる世界が描かれた。また、現実と嘘が混じり合い、事実と想像が区別されないものもあった。しかし、そうした報道は、当時の知識人にとっては特に不都合なことではなかった。なぜなら、それによって読者は、全く理解できない西洋の科学技術などを、無理やり自らの伝統的な価値観のなかに収めることができたからである。その意味では、『点石齋画報』と『飛影閣画報』は、価値観が転換する時の中国知識人の彷徨と苦痛を忠実に反映したものだ。この二つの画報という窓口を通して、十九世紀八十年代から九十年代末頃までにおける一般的な中国人の西方に対する認識を窺うことができると考えるものである。

